

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 概観・クック時代の太平洋諸島民

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 榮吉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001602">https://doi.org/10.15021/00001602</a>

## 1 概観・クック時代の太平洋諸島民

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1 概観・クック時代の太平洋諸島民   | 13 ふたつのグループに分けられる住民 |
| 1.1 故郷は東南アジアに       | 14 どんな暮らしをしているか     |
| 1.2 島々へ進出したのはモンゴロイド | 15 万物に宿る超自然力マナ      |

### 1.1 故郷は東南アジアに

太平洋の地理像は、16世紀以降にこの地域に乗り出してきたヨーロッパ人航海者たちの辛苦のうちにしだいに明るみにだされてきた。だがその全貌がほぼ明らかになるのは、1768年から79年にかけて前後3回にわたってこの地を探検航海したイギリス人キャプテン・ジェームズ・クックの偉業をまっけてのことである。しかし偉業といえば、そうしたヨーロッパの航海者が立ちあらわれるはるか以前、文字も金属器も知らない石器時代の技術段階の人びとが、空漠たる太平洋の荒波を乗り越え、そこに散らばる無数の島々にほとんどくまなく住みついていた事実こそ、人類史の奇跡とも呼びたい偉業として特筆されるべきだろう。

太平洋はあまりにも広大で、石器時代人がそれを克服するのは困難だという思いこみから、クック以降、太平洋諸島民の起源についてさまざまな憶測がなされてきた。太平洋諸島とその住民を、水没したかつての大陸の名残であろうとする荒唐無稽な説や、ポリネシア人の祖先はつねに東から西へ向かう卓越海流と卓越風に乗ってのみ渡洋航海が可能だったとし、その起源地をアメリカ大陸に求める説などがその代表的なものである。

第2次大戦後まもない、1947年、ノルウェーの人類学者トール・ヘイエルダールは、コン・ティキ号と名づけたバルサ材の筏で、ペルーのカヤオから東ポリネシアのトゥアモトゥ諸島ラロイア環礁まで7280km、102日間の漂流を成しとげた。長い大戦に疲弊していた世界の人びとは、このヘイエルダールの壮挙に惜しめない喝采を送ったものである。

ヘイエルダールのこの漂流は、単なる冒険心から出たものではなかった。太平洋諸島民の祖先はどこから来たのかという、古くからの人類学上の問題の解答を求めて試みた、ひとつの実験だったのである。彼は、太平洋諸島、なかんずくその東部の住民であるポリネシア人の祖先は、南東貿易風に送られて南アメリカから渡来したに違いないと考え、その可能性を実証しようとして、この漂流を試みたのである。しかしこの仮説は、実は長年をポリネシアで過ごした宣教師ウィリアム・エリスが1830年に唱えた説のリバイバルであって、ヘイエルダールの創見ではない。

可能性は実証された。だが、可能だということと、それが実際におこなわれたということとは、別問題である。ヘイエルダールの思いとは別に、少なくとも現時点での人類

学の知見は、ポリネシア人も含めて太平洋諸島民の祖先が東南アジア方面から拡散してきたものであるとしている。その概略を述べると、次のようになる。

## 1.2 島々へ進出したのはモンゴロイド

いまからおよそ5～6万年前、それまで無人であった太平洋諸島に、インドネシアあるいはフィリピン方面から初めて人類が移住した。ニューギニアがその最初の移住先であり、そこから彼らは当時陸つづきであったオーストラリアへ移動する一方、メラネシアの島伝いに南下をつづけた。彼らは人種的にオーストラロイドと呼ばれ、元来オーストラリア先住民と同じグループに属する人びとであった。

ところが、時代はずっと新しくなって紀元前1500年前後のころ、別のグループが東南アジア島嶼部からメラネシアに入り、紀元前1000年ごろまでにメラネシア最南端にあたるフィジー諸島とニューカレドニア島とに到達した。このグループは人種的にモンゴロイドに属する人びとであるが、その南下の過程で先住のオーストラロイドとさまざまな程度に混血を繰り返したことはいうまでもない。ただ、モンゴロイドの進出以前に、オーストラロイドがどのあたりまで南下していたかという問題は、残念ながら未解決のままである。

多少なりともオーストラロイドの血を混じえたモンゴロイドは、紀元前1000年からそう遠くない時期に、ポリネシア西部のサモアとトンガの両群島に進出した。この後、島から島へ、現在のポリネシア全域へと広がっていくが、その際、東部ポリネシアで最初に殖民されたのはマルキーズ（マルケサス）諸島で、紀元300年ごろのことであった。イースター島は5世紀ごろ、ハワイ諸島へは7世紀ごろ、そして8世紀にはソシエテ諸島へとつづくが、これらはすべてマルキーズ諸島から殖民されたものである。ハワイはこれとは別に、12世紀ごろにソシエテ諸島からも移民を受け入れており、またこれに先立つ10世紀ごろにはニュージーランドへもソシエテ諸島から殖民されている。

ミクロネシアには、ふたつの殖民の流れがあった。そのひとつはフィリピン方面から東進したもので、紀元前1500年ごろにマリアナ諸島とパラオ諸島とに定着した。他のひとつは、メラネシアを南下し、やがてポリネシアに拡散したモンゴロイドと同じ流れに属する1派で、彼らはメラネシアのニューヘブリデス諸島付近から反転し、ギルバート諸島を経て、中・東部カロリン諸島とマーシャル諸島とに流入した。今から2000年前ごろのことである。

以上は、現在の考古学と人類学の知見によって描かれる太平洋諸島民の移動史の大まかな図式であって、決して決定的なものではない。今後の研究の進展によっては、修正を迫られることがあるかもしれない。

### 1.3 ふたつのグループに分けられる住民

太平洋の島々の住民は、黒い肌をして細かく縮れた髪をもつ人びとと、褐色の肌をしてゆるやかに波打った髪の人びとの、ふたつの人種グループに分けることができる。前者は先にも触れたオーストラロイドで、ニューギニアをはじめとするメラネシアの住民であり、後者はポリネシア、ミクロネシアの人びとで、モンゴロイド人種に属する。しかし、すでに述べたように太平洋のモンゴロイドには多少なりともオーストラロイドの血が混じっている。

言語の点でも、太平洋諸島民はふたつのグループに分かれる。パプア諸語を用いる人びとと、オーストロネシア語族の諸言語を使う人びとである。正確な数はわからないが、太平洋諸島にはおよそ1200以上の異なった言語が分布しており、このうちニューギニアの大半と、サンタクルーズ諸島（ソロモン諸島の南東に位置）に至るまでのメラネシアの島々のあちこちに散在する合わせて700以上の言語が、パプア諸語の名で一括される。その他のニューギニア海岸部、メラネシアの大半、全ポリネシアおよびミクロネシアの諸言語はオーストロネシア語族に属する。

オーストロネシア語族というのは、インドネシア、マレーシア、フィリピンをほぼ中心として、西はインド洋西縁のマダガスカル島から、東はポリネシア東端のイースター島まで、そして北は台湾の原住民（高山族、高砂族）の言語も含んで広がる大言語集団である。太平洋諸島にこの言語を運んできた人びとは、前述のモンゴロイドであった。これに対してパプア諸語は、元来オーストラロイドの言語である。しかし、モンゴロイドの南下にともない、モンゴロイドがオーストラロイドの血を吸収する反面、ニューギニア海岸部と残りのメラネシアの大半のオーストラロイドは、パプア諸語からオーストロネシア諸語に変わっていったものと考えられる。

### 1.4 どんな暮らしをしているか

太平洋諸島民の基本的な生業は、熱帯性の根茎作物と樹木作物の原始農耕である。根茎作物にはタロイモ（サトイモの仲間）、ヤムイモ（ヤマノイモの仲間）、サツマイモ、タシロイモのほか、ヨーロッパ人によって持ち込まれたキャッサバがある。掘り棒を唯一の道具として鋤・鋤は用いられなかった。樹木作物にはココヤシ、サゴヤシ、パンの木、バナナなどがある。このうちココヤシは、その果肉（ココナツ）が食料となるほか、これを乾燥させたコブラが良質な油脂原料として商品価値をもち、プランテーションもおこなわれて、重要な現金収入源になっている。

一方、大洋に浮かぶ島という環境から、漁業も盛んである。釣りによるほか漁網<sup>うけ</sup>や釜が用いられ、潮の干満を利用した石干見とか村人総出の追い込み漁や、カヌーの上からサメに輪索をかけて捕らえる漁法も各地に見られる。こうした伝統的漁法に加え、近代漁法もソロモン諸島などで進められている。

カヌーは、その形や大きさ、構造に地域差があるものの、基本パターンはインドネシアに由来するもので、船体の片側から2本以上の腕木を出し、これに竹か丸太の安定材を取りつけた、いわゆるアウトリガークヌーである。櫂あるいはパンダナスの葉で編んだ帆で推進されるが、近年は船外機の普及がめざましい。

在来の家畜は、犬、豚、鶏の3種だけである。これらは、タロイモ、ヤムイモその他在来作物とともに、人びとの祖先が東南アジアからの移動に際してともなってきたものである。

このように同様な生業形態をもつにもかかわらず、メラネシアと、ポリネシアおよびミクロネシアの社会組織には、かなりの相違が認められる。メラネシアでは、数十人から数百人規模の村落が生まれ、親族で構成するこの小さな村落が独立した政治単位だった。親族の結合をもたらす原理は父系のことも母系のこともあった。現地語と英語の混合語であるピジン・イングリッシュで「ビッグマン」(またはビクマン)と呼ばれる個人の能力にもとづく指導者もしくは有力者はあっても支配者はなく、原理的に平等主義にたつ合議制で政治が運営された。

他方ポリネシアとミクロネシアでは、数か村どころか1島すべてを占める、あるいは数島を版図に含む首長国が形成され、身分階層制にもとづく貴族社会がおこなわれていた。首長国の頂点にたつ大首長は創造神の直系子孫で現人神と目された。彼の権威と権力は絶大で、人民に対して生殺与奪の権限をほしいままにした。厳しい身分制社会にもかかわらず、たてまえとして首長国の成員はすべて1人の共通祖先に結ばれ、ポリネシアでは同一系統に父系と母系が入り混じる選系、ミクロネシアでは概して母系の出自と考えられていた。

したがって支配者と被支配者のきずなは、親族の相互義務の観念にあったのである。大首長が君臨する整備された首長国の体制は、とくにポリネシアのトンガ、タヒチおよびハワイに顕著に認められた。これらの群島では、ヨーロッパ人の来航以前すでに、政治は中央集権の萌芽状態にあったといえる。身分制社会は東部ポリネシアでは現在ほとんど解体してしまったが、西部ポリネシアのトンガ王国などは、伝統的な社会組織のままに近代国家へ移行した数少ない例である。

ポリネシア人、ミクロネシア人は航海民で、その優れた航海術によって島々のあいだを日常的に行き来していたが、メラネシア人は非航海民で、その行動圏は狭かった。村域を越えて行動することはまれで、このためメラネシア人の社会は閉鎖的で排他的であった。しかし、たとえばニューギニア中央高地産の極楽鳥の羽毛が海岸地方の貝製装飾品と交換されていたように、250kmにもおよぶ遠距離交易もなかったわけではない。こうした遠距離にわたる物流は、短距離交易の連鎖によるものか、そうでなければトロブリアンド諸島民のような限られた航海民の社会に特有のものだった。

今日の太平洋諸島の人びとは、ほとんどすべてキリスト教徒といてよく、どんな辺

地にもキリスト教会を見ることができ。キリスト教の普及は、1797年にロンドン伝道協会がタヒチとトンガで伝道事業に着手して以来のことである。しかし、こうした普及にもかかわらず、伝統的な宗教観念も根強く生き残っている。

一部メラネシア人のあいだには、共同体の成員がみずからをある種の動植物つまりトーテムの子孫であると信じている。オーストラリア先住民の宗教観念（トーテミズムと呼ばれる）と同種の信仰とみられるが、メラネシア人にはむしろ精霊信仰が強い。宗教行動は実利を目的とし、たとえば災厄をそらせたり、なんらかの利益を得たりするために、精霊たちを鼓舞する儀礼がおこなわれる。つまり、メラネシア人の宗教は、人間関係と自然をコントロールするために精霊を操作する信仰と儀礼の体系で、その精霊を操作する手段が呪術だった。ここでは儀礼は呪術儀礼といえる。こうしたメラネシア人の宗教には、仏教やキリスト教的意味での「崇拜」はなかった。呪術はだれもが多少とも心得ており、とくに専門の呪術師はいなかった。

ポリネシアとマイクロネシアの宗教も実利的で、倫理よりも力、善よりも効果、公正よりも成功が強調され、儀礼の目的は神々の加護を求めて神々と融和することにあった。ポリネシアには多数の神々があり、その神々にはたとえば火山の神、農業の神、工芸の神、戦争の神のように、自然と人間の活動の各分野をつかさどる専門もしくは職能があり、さらに神格にも高下の差があった。これはいうまでもなく、ポリネシア社会の身分階層制を反映したものである。

こうした宗教観念がとくに発達していたのは東部ポリネシアで、そこには神意を通訳する儀礼専門家としての司祭がおり、その職能を介してときに大首長に対しても大きな影響力を発揮した。西部ポリネシアとマイクロネシアでは、神々の数も少なく、むしろ精霊信仰優勢で、その点ではメラネシアに似ていた。

## 1.5 万物に宿る超自然力マナ

3地域を通じて、太平洋諸島民はマナ (*mana*) の存在を信じていた。マナとは、生物・無生物を問わず万物に宿る超自然力で、その多寡、強弱によってものごとの成功、不成功が決まる。たとえば優れた獵人は、その技量よりも弓矢に宿った強力なマナゆえに、いつも獲物に恵まれるのである。

マナは移転する性質をもつので、増えたり失われたりすることがあった。メラネシアでは、他人のマナを獲得し、自分のマナを増強するために首狩りや食人がおこなわれた。身分制社会ポリネシアでは、身分の高下によって生まれながらにマナの量や強さに差があると考えられ、とくに大首長は神の強大なマナを身に帯びているものと信じられていた。大首長の聖性の源泉はここにあった。万一、俗人が大首長に触れたなら、彼は高圧電流に接したように大首長の強大なマナを一気に注入されて身の破滅をきたし、他方、大首長はマナを喪失して聖性を失うことになる。格差の大きいマナ相互の接触は、きわ

めて危険なことと考えられていた。

この危険回避のための禁制がタブだった。タブー (taboo) という英語は、元来、ポリネシア語のタブ (*tapu*) から出ており、クックがポリネシアからもち帰ったことばである。ポリネシアでは、タブーは社会統制の手段として機能し、首長制もしくは貴族制の維持のうえに大きな役割をはたしていた。

最後に、入れ墨を意味するタトゥー (tattoo) という英語もまた、タトゥ (*tatu*) というタヒチ語に由来している。当時のタヒチをはじめポリネシア社会では、入れ墨の習俗が非常に盛んで、成人のしるしと同時に、身体装飾としても流行していたのである。